

幼児期の道徳性の形成と仏教保育

著者	橋本 弘道
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	16
ページ	197-214
発行年	2011-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000390



幼児期の道德性の形成と仏教保育

鶴見大学仏教文化研究所所員 橋本 弘道

序

人間の特定のコミュニティにおける行動規範を道德という名称で規定する場合、その道德は何が基準になり形成されているのか、また、幼児期における道德性の形成はどのように行われているのか。これらの点について仏教および仏教保育の視点から探求していくことが本論文の主な目的である。

一、宗教と道德

通俗的に、日本人は独特の宗教観を持っているといわれている。通常、道德観は宗教によって規定される。キリスト教圏やイスラム教圏では、日本における道德にあたるような性質のものは神との契約によって成立するものであり、日常の生活規範は、それらの宗教に大きく依存している。

しかし、日本においてはそのようなものを見出しづらい状況にある。例えば、日本において、信仰する宗教は何かと問われた場合、「家の宗教は仏教の〇〇宗ですが、私は特定の宗教は信じていません。」などと返答するのが一般的である。それは、宗教を持つ者からすれば生活における秩序を形成するための基準を持たないということになり、結

果的に無秩序状態にあることを意味している。しかし、一方で日本人が無秩序な状態で生活しているかといえば、決してそのような状態にないことは明らかである。

その意味では、日本における宗教観や道徳観はどのような関係にあり、日本人は、どのような規範意識によって生活を秩序づけているのかという疑問が生じる。そして、それらに考察を加えることは、幼児期の道徳性の形成に関する構造を理解する上でもたいへん重要な視点になると考えられる。

山本七平は中東協力センターの川田専務理事の言葉を引用し次のように述べている。

以下、イスラム圏で実務を担当する者の代表者とも言うべき、中東協力センターの川田専務理事の言葉を引用させていただこう。

ある体験から、これ（イスラム体制）はちょっと違うのではないか、と思うようになりました。その体験というのは、私が現地のローカル・クラークを雇ったんです。ローカルといいますが、ロンドン大学を出てイギリス人と結婚しているという、まあ、その土地ではさうとうのインテリなわけですな。二年くらい一緒に働いてもらったんですが、あるとき宗教の話が出まして、あなたの宗教は何だというわけです。私は結婚式は神式でやって葬式は仏式でやるという、極めて平均的な日本人ですから、正直に、特別な信仰はないと言いますと、いや、そんなはずはない、あなたの行動を見ても、他の日本人を見ても、絶対に何らかの宗教をもっているはずだと言ひ張る。揚句は、もし日本人が宗教心が少ないとしたら、日常の生活はどうやって規律が保たれているんだ、とたずねるわけです。たとえば、泥棒をしないとか、人を殺さないとか、そうした社会に共通のルールは。

当然、私は法律の存在を口にしたんですけれど、彼が答えるには「法律があつたって、人が見ていないと

ところでどうやって守るんだ」そのとき、私、愕然としましてね。イスラム教というのは、平均的日本人が考えるところの宗教とはまったく別ものであるということを感じとりました。……

言うまでもなくこの場合、相手が宗教と言ったのは「絶対的規範」のことである。そして宗教とは何らかの絶対性をもってその人を規定している「掟」すなわち規範であることは、いずれの社会でも同じである。従って「宗教がない」と言われたとき、相手はそれを「無規範」と受け取ったがゆえに非常に驚き、同時に平生の川田氏を見て、絶対にそんなはずはないと言ったわけである。¹⁾

我々日本人にとって宗教とは、川田が「私は結婚式は神式でやって葬式は仏式でやるという、極めて平均的な日本人ですから」と述べているとおり、宗教的文化として受容している場合がほとんどで、自らの行動規範を絶対的に規定する信仰としての宗教であるという認識はほとんどないのである。このことは同時に、教育の面にも大きな影響を及ぼすことになる。宗教が社会規範の中心となっている社会では、教育においても、宗教がその基盤になる。

例えば、「しつけ」は、家庭における教育の根本であるが、これは、親自身の子どもを育てるうえでの方針や原則に基づいて行われる。その方針や原則の根幹をなすのが宗教なのである。よって、宗教を持たないということは、教育の根本となる方針や原則がないと捉えられかねないのである。

これについて、小室直樹は次のように述べている。

日本に限って、しつけは宗教に結びついていないと思いますね。日本のしつけは、社会の中からじんできたようなものだと思います。しかし、欧米では、しつけは密接に宗教がからんでいます。²⁾

小室は、「日本のしつけは、社会の中からじんできたようなもの」であり、直接的には、宗教を基盤としていないとしたうえで、欧米では、その事情はまったく違うと述べている。

これに対して色摩力夫は次のように述べている。

ところでわたしは若いころ留学したときも、外交官としていろんな国に行ったときにも、「あなたの宗教は何か」という質問をよく受けました。わたしが、「別がない。日本には神道や仏教など伝統的な宗教があり、宗教が全くないわけではないが、わたしには特別あるわけではない」と答えると、みんな目を丸くして驚くのです。そして、「日本にはあなたのように宗教がない人が大勢いるのか」と聞くので、うっかり「大部分の日本人は事実上無宗教、いわば無神論者だ」と答えると、なお驚いて、「子弟の教育はどうするのか、何もなくてしつけはできないだろう、困らないのか」と必ず言われました。そうすると、こちらはぐつと詰まるわけです。

西洋人の素朴な確信として、宗教はキリスト教だと信じて疑わないところがあります。したがってキリスト教以外の異教徒でもしよがないうのですが、日本人には信仰がないと言うと、あちらではえらい騒ぎになるわけです。昔は欧州諸国の入国審査のときに「宗教」という欄がありましたね。それに「無神論者 (atheo)」と書くと、大騒動になります。とにかく、火星人でも来たんじゃないかというような態度で、無神論者なんて冗談じゃないと、こんなやつを入国させていいのだろうかと入国審査官は悩んだわけです。

われわれ日本人は、「無神論者」と言うときの深刻な意味について、よく考えてみないといけません⁽³⁾。

色摩の「日本には神道や仏教など伝統的な宗教があり、宗教が全くないわけではないが、わたしには特別あるわけ

ではない」という発言は、一般的な日本人にとって充分に首肯できる発言である。それに対する西洋人の反応の方が我々にとつては違和感を感じるのではないだろうか。

そして、ここで問題として明確に浮かび上がってくるのが、では、日本人は宗教によらず何によつて「しつけ」を行い、また、どうやって子どもの道徳性を育てているのかという点である。

文部科学省が著作権を所有する冊子である『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』^①には、幼児が道徳性を形成していく過程が事例を交えて描かれている。この冊子によると、人間は生まれたときには道徳性を持っていないが、「他者と共にあり、他者に合わせようとする、他者との基本的な信頼関係を求める欲求は初めからもっている。この対人的な志向性は、人としての基本的な信頼関係と密接に関連している。」と述べている。乳幼児が道徳性を獲得していく過程で最も重要なものは養育者との信頼関係であり、自らの内面に自然と備わっている「基本的な信頼関係を求める欲求」によつて道徳性が獲得されるとしているのである。

この冊子では、信頼関係が道徳性を獲得するための大きな要素としてあげられているが、日本においては、人間相互の信頼が道徳性を確立するための重要な基盤になっていると考えられているといつて良いであろう。ここには、幼児と養育者という関係性以上に、日本人であれば必ずわかりあえるはずであるという基本的な信頼感が根底に流れていると考えられる。西洋における信とは、神に対する信仰を意味するが、日本においては人間どうしの相互信頼を意味する。ここに着目すると日本人の道徳観と宗教観が浮き彫りになってくる。

二、日本人と宗教

日本には、元来、アニミズムを根底とする土着の宗教が存在したが、外来宗教である仏教が入ってきたとき、日

本人は結果的にそれを受け入れている。世界の三大宗教といえ、仏教、キリスト教、イスラム教が挙げられるが、現在、日本に根付いていると言えるのは仏教ぐらいのもので、キリスト教の信者は全人口の1%程度であると言われているし、イスラム教に至っては、まったくといってよいほど受け入れていない。結婚式をキリスト教の形式で挙げる人は多いが、それは、キリスト教の信者であるからではなく、宗教的文化の面だけを受け入れているにすぎない場合がほとんどである。

歴史的にみれば、江戸時代初期のキリスト教に対する弾圧以降、特に、第二次世界大戦後の日本においては、宗教について政府が大きく規制を加えるという環境にはなかった。しかし、そのような状況下にあっても、キリスト教やイスラム教は日本に根付いているとは言えない。

では、なぜそのような状態になったのか。これについて、小室は、山本七平の「日本教」という言葉を用いて次のように説明している。

日本人の国民宗教は何かというと、山本七平氏は「日本教」という表現を用いた。なにしろ、儒教でもキリスト教でも仏教でも、みんな日本教になってしまふのだから。

日本で仏教がなぜ栄えたのかというと、日本教に変化して戒律をみんな取り払ってしまったからである。⁵⁾

つまり、日本人は、仏教の戒律を全廃することで仏教を日本教に吸収してしまったのだというのである。確かに日本人は、宗教を基盤とした規範、すなわち戒律をことごとく排除してきた。これも日本人の宗教的特徴として特筆すべきことである。ただし、仏教を受け入れた原因はそれだけではあるまい。戒律は、啓典宗教という意味においては、キリスト教にも聖書に記されている守るべきものは存在するし、イスラム教についても同様である。仏教と同時に他

の宗教に関しても戒律を取り払ったうえで受け入れることは可能である。よって、他の理由もあるはずである。さらに大きな理由となりえるのは、キリスト教やイスラム教は一神教であり、そのことが日本人の宗教観と合致し得なかつたからではないかという点である。

要するに、神という超越的な存在との関係性よりも、日本人の人間相互の信頼関係を重んじる志向が強く影響しているのではないかと思われる点である。これらのことは、日本人の道徳性の根本が何に依拠して成り立っているのかということの規定するうえで、大きなヒントを与えてくれる。

キリスト教やイスラム教と仏教との決定的な違いは何か。先に述べたとおり、キリスト教やイスラム教が一神教であることはよく知られていることであると思うが、重要なのは、この一神教であるということが何を意味するのかということである。これを、道徳性という視点で見れば、キリスト教やイスラム教は、自分が神を信じ、神の啓示に従うことによって自分の行動を律していき、その関係性の中から道徳性が形成されるという図式になるということである。

では、仏教を基盤とした道徳性はどのような関係性によって生じるのか。

元来、仏教はこの世の苦しみから逃れるための方法を説いたものであった。よって、絶対的存在である神のような存在を想定していない。釈迦が説いたことは、永遠不変なものはどこにも存在せず、すべてのものが常に変化していくということである。これを個人個人がしっかりと理解し、正しい智慧によって認識することで、苦から解脱することが目標とされている。要するに、道徳性の方向という視点で見ると、キリスト教やイスラム教には、外部に神を求め、その神が、我々のあるべき姿を規定するという道徳性であるのに対し、仏教については、自己のあり方を内省するという方向に道徳性が向かうと考えられる。この方向性が、日本人の従来からの道徳観に合致した結果、日本人に仏教が受け入れられる一つの要因になったのではないかと思われるのである。

小室は、次のように述べている。

ユダヤ教を含む啓典宗教においては、神の欲することがよい、神が欲しないことが悪い、これが大原則である。神の命令は絶対正しい。神が塵にせよと命じたらそのとおりに塵にしなさいといけない。例外を設けたり、許したりしたら、そんなことをした人が罰せられる。

いわば、神を基準とした以外の倫理観はありえないのである。先の日本人学生は、個人としての倫理観だとか、日本人としての倫理観があるので、「たとえ、神の命とはいえ、塵はいけないことだ」などと考える。かくのごとく、日本人は初めから宗教には無縁な人たちといえよう。この視点からすれば、最高の啓典たる聖書の中身を、人間が勝手に選択するなどは瀆神行為にほかならない。だから欧米では小さな子供にも、「ヨシユア記」でも何でもそのまま聞かせている。だが日本では、そんなことは全く考慮せず、啓典の一部にも拘らず平然と隠して聖典を教えている。やはり、宗教無知の日本人らしい教え方といわねばなるまい。⁽⁶⁾

この小室の説は、逆説的に論じれば、仏教は、神を想定しないため、神との契約という考え方自体が存在せず、それゆえ、仏教に日本人独特の倫理観を融通無碍に取り入れながら土着化させることにより、完全に取り込んでしまったということを示しているとも言えよう。仏教の根本思想である因果律を受け入れることは、日本人にとって何の違和感も生じなかったのではないかと思われる。仏教の因果律の思想も我々日本人の基本的考え方に合致したのだと思われる。

因果律を日本人が違和感なく受け入れることができた理由に、日本の気候風土を挙げることができよう。稲作を中心とする農耕を生活の糧としてきた日本人にとって、春先に種をまき、秋には収穫を迎えることができるという、四

季を通じた自然のサイクルは、明らかに原因と、縁を媒介とした結果について説く仏教の考え方に合致している。そして、現在も、この因果律の考え方は日本人の道徳観に大きな影響を与えている。

これらの事例を検証すると、日本人の宗教観とは、外来の宗教に対するとき、伝統的な既存の宗教観に合致していると思われる部分は取り入れ、そうでない部分は排除するという形で取り込み、決して原型のまま、まるごと受け入れるようなことはしないということがわかる。よって、唯一の神を信じ、「神の欲することがよい、神が欲しないことが悪い」という道徳観を前提とする宗教を、日本人はなかなか受け入れないのである。

この傾向は、日本人の、自らの宗教について問われたときの応答に如実に表れる。先に引用した川田や色摩の発言は、一般的な日本人の宗教に関する見解として特に違和感を感じる面はない。先に、色摩が海外において自らの宗教を聴かれたときに、「別にない。日本には神道や仏教など伝統的な宗教があり、宗教が全くないわけではないが、わたしには特別あるわけではない」と答えたという事例を挙げたが、日本国内であれば、そう答えることでそれを聴いた日本人は逆に安心するのではないかとすら思われる。それはなぜか、なぜならそれが山本の言う「日本教」の信者としての反応だからである。日本においては、神による規範は存在しないが、世間共通のコンセンサスによる規範は存在する。自分の、特定の宗教を信じているわけではないということの表明は、自分は世間共通のコンセンサスによる道徳観によって生きていますということの表明なのである。よって、そのことを表明することで、お互いがどのような道徳観、価値観によって生活しているかが確認できるのである。

それに対して、海外における自らの信仰の表明は、例えば、自分は仏教の規範に添って生きていますとか、キリスト教の規範に基づいて生きていますということの表明であるため、相手は、仏教を信仰しているのであれば基本的にこのような考え方で生活しているのだな、キリスト教を信仰しているのであればこのような価値観を持っているのだなということがある程度わかるわけである。よって、その人どどのようにつきあえばよいかが推察できる。

その意味で、日本人においては、日本人共通のコンセンサス、いわゆる常識というものが日本人の生活をコントロールしているという点で、常識は宗教と同じ役割を果たしていると考えられるのである。

では、その常識とはどのように形成されるのか。日本人相互のコンセンサスによって常識が形成されるということは、その常識の基盤は常にその状況下で移り変わる可能性があるということにはならないか。

山本は、『空気』の研究^⑦において、日本では、その場の空気によって物事が決められていくという説を唱えている。どんなに正論で、どんなに合理的な発言であってもその場の空気に反していれば黙殺されたり、発言を控えざるを得ないような強いプレッシャーを感じるような状況に追い込まれる場合が多いというのである。

現在においても、 $\times\times$ (空気が読めない)であるとか、「空気を読めよ」といった発言が若者たちに流行語のように使われている。若者たちにとっても人間関係を形成するうえで、お互いが醸し出すその場の「空気」は、物事を決める上での重要な要因になっているのである。このような現象を垣間見ても日本人相互のコンセンサスは、お互いのその場における「空気を読む」ことによって形成されていると考えて良いであろう。

また、「空気を読む」ためには、周囲の人々の精神状態に敏感でなければならぬ。子どもたちは幼い頃から「おもいやり」を持って行動するように教育される。辞書によれば、「おもいやり」とは「人の身になって心を配り、いたわること。また、その気持ち^⑧」とある。相手の立場になって考えることができるような心を持つことが思いやりの心を持つということであるなら、その心を持つことが「空気を読む」ことの重要な土台の一つになると考えられる。よって、そこに、「思いやり↓空気を読む↓常識↓規範」という図式が成り立つことがわかる。これが、日本人にとつての宗教の代わりになっているのである。そして、これらによって日本人の規範は保たれているのである。よって、結果的に欧米のような規範を司る宗教は、不要だということになる。また、それらの規範は、その場の雰囲気大きく左右される可能性があるということになるのである。

では、この常識に基づく道徳観を子ども達はどのような形で身につけていくのであろうか。

三、子どもの道徳観の形成

先に取り上げた文部科学省の『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』では、子どもの道徳性には、「他律的な道徳性」と「自律的な道徳性」があると述べている。

幼児期には、母子間での一对一の関係性から一対多数という関係性に生活の範囲が急速に広がっていく。そうすると、人間関係を形成する上で、さまざまな約束事も増えてくる。さらに、保育所や幼稚園で集団生活をするようになれば、自宅でのルールだけでなく、集団生活をするうえでの約束事も生じる。ここで子どもはその場その場でどのような行動を取るべきかということを学んでいくことになる。

幼児期においては、ものの善悪を判断する場合、「言われたから」とか、「怒られるから」といった大人から言われたことを正しいと考えて行動する場合が多い。良いか悪いかということをも自分で判断するのではなく、大人から言われたことを材料にして判断するのである。これを「他律的な道徳性」という。

しかし、この「他律的な道徳性」だけでは道徳性を育てるとは言えない。正しい道徳性の育みとは「他律的な道徳性」と「自律的な道徳性」の両方によって育まなければならないのである。「自律的な道徳性」とは、自らが良いか悪いかを自分の頭で考えることで自分の行動をコントロールしていける道徳性のことである。

当初は、「他律的な道徳性」が大半を占めている場合であっても、日々の生活や遊びを通して、なぜその行為をしてはならないのかということを経験的に学んでいくことになる。怒られたから悪いという捉え方から、ルールを守らなければお互いが仲良く遊べないから悪いのだというような捉え方に変化していくのである。ルールの必要性を充分

に理解することによってそれに従うことができるようになっていく。その意味では、日常の遊びが子どもにとって社会生活というものを身につけていく過程でいかに大切なものであるかがわかる。このように「他律的な道徳性」と「自律的な道徳性」の両方によって道徳性は育まれていくことになるのである。⁽⁹⁾

しかし、子どもが次第に成長していくにつれ、自我が確立しはじめると、反抗期を迎え「他律的な道徳性」の基盤になってきた大人からの行動の規制に反発を覚えるようになる。ここで、「自律的な道徳性」が育つていれば問題ないが、盲目的に大人から言われたことに従ってきた場合、道徳的行動から著しく逸脱した行為をすることが考えられる。「他律的な道徳性」が大人からの規制によって担保されてきた場合、大人への信頼感が保たれている間はよいが、それが消失した場合、道徳性も消失してしまい、反社会的行動を取るようになることも考えられるのである。

この場合、宗教による戒律、つまり宗教による規制が生活の基盤になっていけば、「他律的な道徳性」は依然として保たれることになる。なぜなら、神はいかなるときも絶対者だからである。

では、特定の宗教への信仰心を持たず、さらに、宗教から戒律を取り払ってしまう日本人は、道徳性をどのように保っているのか。先の引用にもあるように、それが、欧米人にとっては大きな疑問なのである。

その点については、日本人にとつての「自律的な道徳性」についての捉え方に関して考察を加えていくことが、その疑問を解く上での重要な鍵になると考えられる。

俗に、日本人は何でも「道」にしてしまうとされるが、武道や剣道、書道や茶道、華道など、さまざまなものに道というものを見いだし、どのような道であろうと、それを究めていくことで人格が形成されていくのだという考え方を持っている。すなわち「自律的な道徳性」を重視する面が大変に強いのである。先の文部科学省の冊子においても、「他律的な道徳性」から「自律的な道徳性」への移行が強く意識されていると感ぜられる。

他人に對し思いやりを持ち、自らはしつかりと特定の道を究められるように精進する。また、それに伴い自らを内

省することによって、「自律的な道德性」が高まり人格が完成していく。そのような過程と方向性が好ましいと感じているのである。これは、日本人が外部から規範を与えられるような「他律的な道德性」ではなく、自分で自分をコントロールできる「自律的な道德性」こそ正しい「道德性」であると感じているということをも意味していると考えられる。

四、子どもの道德観の形成と仏教

では、そのような道德性を備えることと仏教の考え方には、どのような関連があるといえるだろうか。また、仏教保育は道德教育という側面においてどのような役割を担っているといえるのであろうか。

日本人の道德性においては、「自律的な道德性」が重視される傾向にあるということについては先に論じたが、ここでは、さらに論を進め、道德性の問題に仏教の考え方を持ち込むことで「他律的な道德性」をも「自律的な道德性」へと転化することができるという点について論じる。

仏教の考え方が「他律的な道德性」を「自律的な道德性」へと転化させるということはどうか。それは、仏教が一神教とは大きくその宗教的性質を異にしているという点に起因する。

先に論じてきたように、一神教においては、「他律的な道德性」が神という存在によって担保される。それを、仏教における仏にそのまま置き換えるような図式になるであろうか。すなわち、神の代わりに仏によって「他律的な道德性」が担保されるという図式を想定するとどのような図式になるかということである。

ここで着目しておきたいのは、仏教と一神教との大きな違いである。仏教においては、人間は悟ることによって仏陀になることができると考えるが、一神教においては、人間と神とは完全に別の存在である。さらに、仏の存在は自

己の外に悟った者として想定することも可能であるし、自らの心を仏として想定することも可能である。よって、自己の外側に仏を想定することもできるし、自己の内側に仏を想定することもできる。そうなるを仏を媒介にして「他律的な道徳性」を「自律的な道徳性」に転換することが可能になる。すなわち、「他律的な道徳性」⇔神⇔（転換）⇔仏⇔「自律的な道徳性」という図式が可能になるのである。

文部科学省の冊子においては、「他律的道徳性」とは親や周囲の大人からいわれることに従おうとすることで生じる道徳性であると説明している。要するに、大人の権威によって生じるのが「他律的な道徳性」であるということである。一神教の世界ではそれを神に置き換えることが可能なため、たとえ大人の権威が失墜してもそれを神によって代替することができる。しかし、先の日本人に関する議論のように、一神教のような信仰を持たない者にとっては、大人の権威が失墜してしまうと「他律的な道徳」が完全に消滅しかねない。その部分を日本人は、仏を媒介にして「自律的な道徳性」へと転換し内包してしまっていると考えられるのである。

元来、仏教においては、釈尊の言葉である「自灯明」「法灯明」という言葉が象徴するように、自らを抛り所とし、法を抛り所としていくという考え方があつた。よって、これを道徳性についての議論と結び合わせると、仏という対象を自分の外に想定し、その教えである法を「他律的な道徳性」として規定すれば、法を抛り所としている自分を寄りどころとする「自律的な道徳性」に転換するという図式が成り立つということになるのである。よって、議論の帰結として、日本人の道徳性においては、「他律的な道徳性」⇔「自律的な道徳性」という図式が成り立つということになる。

仏教保育においては、「ののさまは、口では何にもいわないが、あなたのしたこと知っている。」というフレーズの歌があるが、これは、「ののさま」の存在という他律的な存在を「あなた」（自分）の中に自律的な存在として規定していく働きであると考えることができる。また、普段、子供たちをしつけるときに、子供の良心に訴えるために「自分の心に聞いてみなさい。」というような投げかけを行うが、これは、「自律的な道徳性」をより強く促すためのもの

であるといえよう。

以上のように、日本人は、最終的に「他律的な道徳性」を「自律的な道徳性」に転嫁することによって道徳性を担保していると結論づけることが可能になるのである。

五、道徳観の形成と仏教保育

次にこのような道徳性の獲得に際して仏教保育がどのような役割を果たしているかという点について考察を加える。

仏教系の保育者養成校では、必修科目として仏教保育という科目が設定されている場合が多い。学校によってその位置づけはさまざまであろうが、T大学短期大学部を事例として取り上げると、この科目は、将来保育者を目指す学生に対して仏教の考え方と実際の保育とがどのような関係性にあるのか、仏教の考え方がどのように保育に役立つのかという点を中心に授業を展開している。そして、仏教は生きるための智慧を育む宗教であり、「いのち」についての探求を行う宗教であるという点に保育との共通項を見出している。

日常生活において、我々はさまざまな形で仏教思想に影響を受けている。しかし、学生は、宗教的知識が乏しいため、それらに気づいていない場合が多い。仏教保育という科目についても、初期の段階では、保育と仏教がどのように関係しているのかということについて疑念を抱き、学校が設定した必修科目であるため履修したに過ぎないという学生がほとんどである。

したがって、まず、保育と仏教は「いのち」というキーワードでつながっていることを説明し、長い歴史を通じて日本人が培ってきた宗教観と仏教思想が日常にどのような生かされているかということについて説明を加えることか

ら授業をスタートさせることになる。

例えば、因果律は、仏教の中心思想であり原因と縁によって結果が生じるという考え方であるが、「因を種子、縁を環境、果を実」に例え、さらに「因を先天的素質、縁を社会環境、果を人格形成」と例えることにより、縁の役割を担う者としての保育者の役割を印象づける試みなども行われている。

さらに、私たちは、「自分がしたことはかならず、まわりまわって自分のところにかえってくる」であるとか、「情けは人のためならず」などという諺の通り、因果律による価値観によって子供たちの道徳性をはぐくむ場面がある。これらを、仏教思想に基づく考え方であり、仏教保育であると規定するならば、家庭でも保育の現場においても、仏教保育はさまざまな場所で行われていると考えることが可能になる。そのような日常生活において仏教における考え方が生かされていることを再確認し意識することにより、さまざまな場面を仏教思想を通して客観的に把握し、保育を分析的に捉えていくための手段にすることが可能になる。その意味においても、科目としての仏教保育は、先に述べた幼児の道徳性の育みを含め、保育の原理を培うものとして重要な位置を占めていると言えるであろう。

結

これまでの議論をまとめ、さらに考察を加えると次のようになる。

(1) 日本人は、一神教に象徴されるような神からの啓示によって与えられる戒律としての社会秩序ではなく、日本人相互において醸成される価値観によって社会秩序を形成している。

その価値観の形成は、「①他人に対しておもいやりを持つ↓②他人に対しておもいやりを持つことで、その場の空気を読むことが習慣づけられる↓③その場の空気を読むことを繰り返しすることによって常識を獲得する。↓④お互いが

常識を醸成していくことで暗黙の規範を形成する。」という過程を踏んで行われる。

(2) 子どもの道徳性の芽生えには、「他律的な道徳性」と「自律的な道徳性」という要素がある。「他律的な道徳性」とは、大人から与えられる規正によって担保される。神に対する信仰を持つている者には、大人への従順な信頼感が消失した後も、神によってそれが担保される。

ただし、日本人は、元来、「他律的な道徳性」よりも、「自律的な道徳性」を好む傾向が強く、よって、「他律的な道徳性」が神のような絶対者によって担保されなくても「自律的な道徳性」を強めていくことで道徳性を保つていけるような文化を形成している。

(3) 一神教によって成立する「他律的な道徳性」について、神を仏に置き換えると、「他律的な道徳性」を「自律的な道徳性」へと転換することが可能になる。よって、自分の外に存在する仏を強く意識することは、同時に自分の内面に存在する仏を強く意識することになり、その結果として「自律的な道徳性」がより強く発揮されると考えることができる。

(4) これらのことを含む仏教のさまざまな思想を仏教保育の根本原理とし、その理念に添って仏教保育を行うことで幼児の道徳性の形成が促進されることができると考えることができる。また、保育者が仏教思想に関する知識を持つことは、保育の原理を身につける上で非常に有用なことであると結論づけることができる。

【注記】

(1) 1・ベンダサン『日本教徒』、文藝春秋、一九九七年、二〇八頁～二〇九頁。

(2) 小室直樹・色摩力夫『人にはなぜ教育が必要なのか』、総合法令、一九九七年、五二頁～五三頁。

- (3) 同書、五二頁～五三頁。
- (4) 文部科学省『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』、ひかりのくに株式会社、二〇〇一年。
- (5) 小室直樹『日本人のための宗教原論』、徳間書店、二〇〇〇年、三五―一頁(6)。同書、一九頁。
- (6) 同書、三五七頁～三五八頁。
- (7) 山本七平『「空気」の研究』(文藝春秋、一九九七年)を参照。
- (8) 松村明他『旺文社 国語辞典 第九版』一九九八年(二〇〇四年重版)による。
- (9) 文部科学省、前掲書、五頁を参照。
- (10) 櫻井秀雄・大山興隆他『仏教概論』(曹洞宗宗務庁、一九九二年)三三―頁を参照。